
青き大地の果てに

四方祐樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青き大地の果てに

【Nコード】

N0613D

【作者名】

四方祐樹

【あらすじ】

最後の楽園・ディファアラを求めて旅をするリヴィー海賊団。彼らは海軍から逃れるために孤島・カンビアへと寄ることになった。だがそこで彼らが目にした二つの真実とは。2007年度ノベル大賞一次選考通過作。

青き大地の果てに

『拳式はお前が十七になった春に行うと決まった』

国王である父　グランチェスからことを聞かされたのは、リアンがまだ十四の時。草花が長閑に咲き誇る初春の、普段と何一つ変わらない日だった。

だがその衝撃は幼いリアンにとって、あまりに大きなものであったのだ。頭の中で夏の陽光が輝くような、煌きとも痛みとも付かない妙な感覚にリアンはぼうつと襲われる。

あまりに突拍子もない告白に、リアンはしばし口をきけなくなっってしまった。グランチェスの言葉の、その真意を見出せないでいたのだ。

とはいえ悪くはないリアンの頭だ。理解してから受け入れるまでの過程は、何とも早いものだった。

もとよりリアンは、第三とはいえ王女という身の上。それに交際している男性だって既にいる。いつかは解らない。けれどそう遠くない未来に彼と婚約するであろうことは、どことなく予想していたことだったからだ。

だが予想していたとはいえ、これだけの衝撃を正気で受け止められる者が、はたして幾人というであろうか。ましてやまだ、リアンはたった十四の少女。いくら王宮という特別な環境で育ったとはいえ、これから一層の輝きを見せるであろう時期の娘がだ。どうすればこの真実と向き合えよう。

勿論リアンは交際している彼のことを、けして嫌ってなどいない。むしろ愛しているし、それは確かな事実である。しかしそれ以上にやりたいことが、今のリアンにはあったのだ。

思えばこれから歩いていくリアンの人生など、今よりも縛られた生活を余儀なくされてしまうのだろう。瞼裏に鮮明と浮かぶ窮屈な生活は、最早確信といっても過言でない。

またそもそもにして、この稀少な瞳を持って生まれてしまった以上、リアンにとってそれは避けて通れない道なのだ。

だから拳式をあげる前。まだ幾分自由な時に一度でも

「はい、父上」

胸に痛みを感じながらも深々と頭を垂れる。ブロンドの美しく長い髪が、それに伴ってするするとリアンの美麗な顔を覆っていった。悔いの残る胸の内に、彼女はそつと蓋をする。

一度でもこの夢が見たかったな。

十

「親父い、酒樽一本プリーズ！」

二人の男を従えた若い青年は、酒屋に入るなり大きな声を上げた。カウンターで暇そうに頬杖を付いていた酒屋の親父は元気すぎる男達を見ると、のっそりと頭をもたげる。

「何だ、リヴィーじゃねえか。こんな朝っぱらから一体何の騒ぎだつてんだ」

「いやあ。もうこの町ともおさらばかなって」

リヴィーと呼ばれた者は軽い足取りで親父に近づくと、後頭部を搔きながら大口を開けて壮大に笑った。

しかしそれを見ていた親父の顔は驚きに満ちている。厳つい表情も今ばかりは、それを保てないでいるようだ。唇は無意識のうちにわなわなと震えている。

「おさらばつてお前、……もう発つのか？」

「ああ、昼過ぎにでもな」

あまりに唐突なものだから、親父の声は僅かに上ずっていた。それでもリヴィーは気付かないとばかりに微笑を浮かべると、「なあッ」と後ろにいる男達に声をかける。

双子なのだろうか。鏡から抜け出したみたくそっくりな二人は、短い黒髪を揺らしながら互い相向かいに首を傾げ、「ねーッ」と明

るく肯定的に頷いてくる。

そんな彼らを見ていた親父は嘆息するなり、そうかと一つ頷いた。そこには先ほどまでの驚きは、もうない。何らかの決心が、親父の中でついたのだろう。そうか、お前らも海賊だもんな。と口の中で転がすと、親父は懐かしむようにして三人の姿を見やった。そしてやがて、親父は穏やかにその口を開く。

「お前らがいなくなると、この町も静かになっちまうねえ」
「というのもこの海賊団が来てからは、この町は毎夜毎夜がどんちやん騒ぎだったのだ。」

普通は海賊なんぞといえば、周囲からは恐れられ敬遠される存在でしかない。勿論最初は、彼らも敬遠されていた。海賊にかかわっちゃいけない。奴らも海賊なんだ、と。

それなのにいつからだろう。彼らはこの町の者達と、心から打ち解けていたのだ。仕舞いには初め怖がっていた住人達が、進んで彼らの輪に混ざっていたというほどの事実。それほどまでにこの場所で、彼ら海賊団は愛されていたのだ。その結果がこれだ。

けれどそんな奴らとも、今日でお別れ。親父が寂しいと思うのも当たり前のことだ。

リヴィーもそれを感じ取ったのだろう。その表情には微細ながらも悲しい翳りが差している。だがそれでも心配させまいとして、リヴィーは大仰に肩をすくめると一つ笑って見せたのだ。

「いいじゃねえか。そのほうがきつと、この町にしてみても平和なもんだぜ」

なんてつたつて俺達、海賊だもんな。
そう明るく振舞うと、リヴィーは親父の肩を気兼ねなくぽんと叩いた。

「確かにそうかもしれない、がな……」
だが親父はといえば、どこか気に食わないと言わんばかりに口を『へ』の字に曲げている。そして「ほれ、邪魔だ」とリヴィーの腕を払いながら、酒蔵の方に足を向けていつてしまった。

若いのが余計なお節介をかけやがって……。

バレバレなリヴィーの気遣いに親父は嬉しく思う反面、どこか癪だと思いつながら、荒い鼻息と共に言葉を吐き出した。冷たい土の床に、親父の足音が吸い込まれるようにして響いていく。

「なあオイ。酒、でかいのと小さいの、どっちだ？」

するとしばらく酒蔵を覗き込んでいた親父が、首を廻らせそう言い放った。カウンターに肘をつき気を抜いていたリヴィーは、突然かけられた言葉に不意打ちを喰らう。だがすぐに気を取り直すと「ちっさい方」と答えた。

「何だよ。海賊ならもつと買っていけつて」

「いやあ、こちとら金欠でさあ」

貧乏性？ と苦笑するリヴィーを横目に、さっさとその双子でも呼べと親父はぶっきらぼうに呟く。

「だがここを出るんなら、お前達も気いつけな。この辺りじゃ海賊はみんな、王家に疑われているらしいからな」

「疑い？ ……あの姫さんのやつか？」

カウンターから身を乗り出すと、リヴィーは親父の後ろ姿を見つめた。

「ああ。この国で野蛮な輩せうつて言ったら、お前さんみたいな海賊しかないからな。王女が誘拐されたっていうのを見ている奴もいるらしいし、疑われたつてしかたがねえ」

そう言うつと親父は振り返りながら、リヴィーの碧い隻眼せきがんをじつと見つめてきた。そこには軽蔑ではなく、心配されているような色さえ含まれている。

リヴィーは「あー……」と唸ると、ブロンドの肩まで届こう程の髪を乱暴に掻き回した。その拍子でつけていた黒の眼帯が僅かにずれるが、そんなことなど気にも止めない。分けられた前髪から覗く左目を細めると、リヴィーは心配すんなよと小さく洩らした。

「姫さんを連れ去ったのがどの海賊団かなんて、俺あ知りやあしねえよ。でも俺達なんざ、まだまだ若造だぜ？ しかもすっげえ少数。

捕まえたところで何の特にもなんねえって」

「けどよ、お前らつてば最近やけに有名じゃねえか。『海族らしい海賊』ってな」

そう言うなり親父はやって来た双子を見、それから再度リヴィーを見やった。

海族とは海賊とは違い正当な航海や公益を目的とする、いわば人畜無害な海の民だ。

確かにリヴィー海賊団とは名ばかりで、海賊と名乗っていないながらも未だ悪事を働いたことがない。のんびんだらりと航海をする姿は、まるで海族そのものだ。

もつとも海賊旗を掲げている時点で、世間では一応、海賊として見られてはいるらしい。だが海賊旗をつけようと言いだしたのはリヴィーの独断で、それもどちらかと言えば用心のためだ。

何しろ海族は海賊と同じ土俵にいるがために、最も彼らの標的になりやすい。海賊に狙われて海の藻屑となった海族など、もうどれほどの数になるだろうか。その数は幾つとも知れていない。それに元々、海賊とは自分より弱い立場の者を襲う習性がある。利益を得るためには、それは当たり前のことなのだ。

それ故に海賊は海賊旗を見ても、彼らは特にぶつかり合うこともしやしないのだ。野蛮な輩同士で戦い、そこで何かを得たとしても多大な犠牲を負う確立のほうに圧倒的に高いからだ。

そこに生じる利益は、ほぼ皆無。そんな無益な戦いなど、利益を求め海賊が進んで応じるであろうか。余程のことが起こらない限り、その戦渦に巻き込まれる心配はない。

だからリヴィー曰く、この大海原で姿を晦ますにはもってこいの道具だったというわけだ。この海賊旗が。

フツと笑った親父は双子の片割れに樽を担がせると、その尻をパシンと叩いた。その顔はもう先の荘厳さをたたえている。

「ま、一応用心だけはしておけ。……って、海賊共に肩を持つのもおかしい話だけだな」

「ははっ、確かにな」

ここに料金置いとくぜ。と金を置くと、リヴィーはカウンターを両の手で押し、踵かかとを返していった。双子達は店を出て行こうとするリヴィーの後についていく。

「世話になつたな」

それだけ言うつと振り返ることもなく、リヴィーは部下と共に港の方へと向かっていった。

珍しく面白い海賊だったという親父の声を、聞くこともなく。

リアン・ヴィス・ジュニティー・クルス第三王女が行方不明になって、もう二年と半分の年月が流れた。

大きな島とそれを取り巻く数多の孤島からなるバリス王国には大きな山がなく、その土地柄か海賊ばかりが生まれていた。『悪いことをする奴は、きつと将来海賊になる』とまで言われるほど、その存在は盗人よりも悪名高い。だからだろう。リアン王女の失踪には、きつと海賊がかかわっている。そう巷で囁かれているのは。

しかし真実はまだ何一つとして解ってはいない。目撃者だと名乗る者は蟻の如く現れ、一様に王女は海賊共に攫われたのだと口を揃えているのだが、それが面白いほどに、どの海賊団なのかさえ一致しないのだ。いや、そもそもにして目撃者が口を揃えて「忘れた」等と言葉を濁すものだから、真相がはっきりしないというだけなのだが。

リアンを攫った犯人がいるのかさえ本当は解らない。犯行文や何か王女を攫ったとされる証拠があれば捜査も進むのだが、生憎犯行文はおろか、靴跡の一つさえ見つかっていないという始末。王女の家出ではないのかとの声も多かれ少なかれ囁かれてはいるのだが、これが何とも不可思議な事件なのだ。

また姿を晦ませたのがリアン王女であることが、何よりもいけなかった。何しろ彼女はこの国の王女であり、王位継承者という身だ。というのも面白いことに、王家には必ずオッドアイの子息が生ま

れてくる。古よりこのバリス王国で、オッドアイとは国を守る者のみ与えられる、最も尊いものとされてきた。それ所以、王位継承権は必ずこの双眸を持った者にのみに受け継がれるのである。

王位継承者であり婚儀を間近に控えられた者が突然いなくなったとなれば、それは国民も揃って騒ぎ立てるに決まっているであろう。後継者がいないだなんて、国家的問題も甚だしい。国中を震え上がらせるには十分な威力をもちえている。

そうか。リアン王女がいなくなって、そんな大層なことになっていたのか……。

爽やかな潮風を浴びていたリヴィーは遠くを眺めながら、ふとそんなことを思った。

そりゃそうだよな。一国のお偉いさんがどこかに消えたんだもんなあ。しかもこの国には海賊くらいしか野蛮な輩はいない。疑われてなんぼじゃねえか。

自然とこぼれるため息を隠そうともせず、リヴィーはそのまま甲板に寝転んだ。

木製の船体は太陽の熱を存分に吸い取っていて、背中は芯から温まるかのようだ。もっとも常夏の国だから、そんなものはただの有難迷惑にしかならないのだが、それもしかたあるまい。

まっさらな空から目を背け小さく唸り声を上げると、リヴィーはごろんと一つ寝返りを打った。はてさて。どうすれば敵に回した王家から逃れられるだろうか……。

「おーう、リヴィーちゃん。そんな所にいると踏んじまうぞー？」
すると頭上からは間の抜けた声が降ってくる。あ？ と首を捻れば、そこには長い真紅の髪が靡なびいていた。そのせいで表情こそよく見えないが、海と同じ色をした碧い空を彩り照らすように、紅い髪の間からは輝かしい陽光が僅かに漏れている。

脛の上に腕を乗せながら、リヴィーはめんどくさそうに身体ごと捻った。

「いーやーだー。踏んだら殴るー。ぜってえ殴るー」

「殴るなんて言うなよー。船長のくせにつれないなあ、もつっ」
そう言うなり、赤毛の青年はギューツとリヴィーに抱きついてきたのだ。

「うるせエ！ てか抱きつくなよローラン！ 一体何のマネだ！」
リヴィーはおもいきり不満を撒き散らす、何か思案する風にローランは唸り声を上げ、

「んー。しいて言うならさ、やっぱり夜這い？」

「このド阿呆、まだ昼間だ！……っじゃなくてツ。何危険なこ
と口走ってんだよ！」

ローランに抱きつかれたリヴィーは顔を真っ青にしながら、じたばたともがき苦しむ。だがそれも長身のローランの前ではまるで、猫に捕らえられたネズミもいところ。無駄な抵抗とはまさにこのことだ。

それを思い知ったのか、リヴィーはもがくのを止めると、代わりに覆い被さるローランの頬をギツとひっ抓んだ。

「テメエ、このクソ」

「いやん。口の悪いコト」

「今すぐ離れる。これ船長命令」

「だってリヴィーちゃん……」

しかし当のローランはまったくもって聞く耳を持つとしない。
イラツときたリヴィーは再度もがくと、空いていたもう一方の手をローランの頬に伸ばした。

「ハア？ 何言っているんですかゴルア。寝てもいないのに何寝言
ほざいていやがるんですか？」

「れもはあ、……っれいらいッ、いらいっね！」

ついにはその手をも使い、リヴィーはローランの両頬を掴みだした。「痛い」と連呼するローランを飽くまで無視して、リヴィーは伸びるところまで彼の頬を引き伸ばしてやる。

「さあ観念しな。お前はもう俺を放す以外、何の術も持たねえんだ

「よ」

「りっついーらん〜」

とはいえローランにはそれも逆効果なようだ。両の頬を抓まれ呂律が回らないながらも、なお喋ろうと試みている。

こいつは蛇かよッ！！と胸奥で叫びながら、リヴィーは更にその指先に力をこめた。

「にやろうッ！ まだ放す気ねエのか」

ギヤーギヤーと半ば取っ組み合いながら二人は騒ぎ立てる。ただ決してボロくはないからとて、ここは船の上。つまり海上なのだ。船が震えているのは、何も波のせいだけではないのだろう。

それに体力自慢の者が二人揃って暴れているのだ。嫌でもよからぬ破壊音が、そこかしこで聞こえてくる。コバルトブルーに澄み切った空の下、どうしようもない男共を見ながら、ウミネコがみゃーと鳴いていった。

「今日はおめえの飯なんてないからな！ 一人でひもじい思いしているよ！」

「ひよいまッ……！？ 酷いリヴィーちゃん！ てか今、モロに舌噛んだんですけどおおおお！」

「船の上で暴れるからだよ、バーカ！」

「うそ、何で俺だけ！？ もしや神のご贖^{ひこぎ}か」

リヴィーちゃんご贖^{ひこぎ}なのか、コノヤロー！ とローランは叫ぶ。

……が、叫んでいる途中にローランの言葉はまたもや遮られたのだ。

「さア、その邪魔な剣士さん。とつとと船長から離れるや」

片手にティーセットを乗せながら、青年はローランの背中を蹴り飛ばす。

巻いた深緑のバンダナの下からは、朝露に濡れたかの如き輝きを放つ短い黒髪を覗かせている。葡萄酒^{ぶどうしゅ}を思わせる切れ長の双眸を不快に細めながら、青年はローランの背に足を乗せたままケツと呟いた。

「聞こえないんですか、剣士ローランさん。難聴ですか？ それと

も歳ですか？」

「二十三で、お前より一つ若いんですけどね。それとも何。もしかして記憶障害だったんですか？ 調理師兼剣士のドリーチェさん」
「おう、悪いな。これでも記憶は正常なんだわ。それに俺ア、お前より頭がいいと誇っているもんでね」

お前と違つて剣だけが取り得じゃねえんだよ。

足をそのままにしゃがみ込みながら、ドリーチェはにんまりと微笑を浮かべた。

また当のリヴィーは二人がそうこうしている間に、ローランの下から抜け出す。養分でも吸い取られたかのような疲労色をその顔に浮かべると、二、三步ふらつきながら歩き、その場にへたり込んでしまった。肩でする息は、どこか荒い。

「阿呆な阿呆なローランさん。神のお告げだ、今すぐくたばれ」

「んな残酷な神様がこの世にいるかよ！ …… ってかりヴィーちゃん、いつの間にな」

ずっと背中を踏みつけられながらの口論をしていたローランは、今気付いたとばかりに眼前にいるリヴィーの姿に目を丸くした。

「やっぱりお前はただの阿呆だ、阿呆剣士だ」

だが一方、その凜々しく荘厳な風貌に似合わぬほどの高笑いをドリーチェは上げている。と、彼はローランをひよいと跨ぐと、リヴィーの前へと舞い降りた。

あまりに軽やかすぎるその動作。ティーセットのぶつかり合う音もない優雅な雰囲気は、一時前とはまるで違う。

「リヴィー。白薔薇のハーブティーを持ってきた。少し気を休めるといい」

海上を吹き抜けていく風よりもなお爽やかなドリーチェの声色。

「あ…… ああ。ありがとう」

斜め前方で倒れているローランの方を見ていたリヴィーは、舞い降りてきたドリーチェの姿にはっとして、慌てて白薔薇のハーブティーを受け取った。途端、しつこくないほどの甘い白薔薇の芳香が

鼻腔をくすぐってくる。香りと同じく甘すぎないそれをリヴィーはちびちびと飲み始めた。

しかしそれも経たずにリヴィーは頭を掻きながら、しっくりこないとカップから口を離す。そして実に言い難そうに、その口を開いたのだ。

「その、さ。いつまでそうしているつもりなんだ？」

「何が？」

「何て言うか、その……ローランさん？」

尻上がりのリヴィーの声に、聞き返したドリーチェはリヴィーの視線の指す先を同じように見つめた。

そこには未だ寝転がったままの、赤いロン毛男の姿が一つ。『くたばった』というよりもむしろ『いじけた』といった方が表現的に合っているかもしれない。意気消沈とばかりに脱力している。しかしそんな負のオーラを全身に纏っているながらも、見える姿はだらしのない四つん這い。窓ガラスにへばり付いたカエルと同じようなものなのだ。

そのせいでローラン自身が痛々しいのかそうではないのかが、最早不明確になっていた。少なくとも存在的には意図されずとも、途轍もなく目立っていることだけは確かであろう。

ティーカップを片手に船縁へと寄りかかっていたリヴィーは、一度ドリーチェへと視線をやり　ティーカップを手渡すと、ゆっくりとローランを前にしやがみ込んだ。

「お前さ、いつまで不貞寝しているんだよ？」

「……お日様が布団被るまで」

するとどこか悲しそうに、リヴィーは「そう」と瞳を細める。

さわさわと髪を揺らしていく潮風。漣うねみの微かな音を聞きながら、リヴィーは一度その隻眼をゆっくりと瞑り

「ドリーチェ。やっぱこいつ飯抜きな」

よっこい、と腰を上げると、リヴィーはドリーチェに向かってそう言ったのだ。

「うわっ、ヒドッ！」

「なんだよお前。お天道様沈むまで不貞寝しているんだろ」

思わずガバツと飛び起きたローランに対し、リヴィーは間髪いれずにそう答える。

勿論夜まで不貞寝をしている気など毛頭なかったローランは、リヴィーのその素直に受け入れる心に愕然とした。

「今さっきの言葉の綾！ 解る？ これの意味解ります？」

「リヴィー」

「あ、悪いな持っていてもらって」

「聞けよ、お前ら！！」

どこまでもローランを無視し、更には悠長にティーカップを渡し受け取っている二人の姿を見て、ローランは思わず「あー、もう！」と叫んだ。

「いじめか！ 新たなるいじめなのか！」

「嫌だよそんなの。軍に捕まっちゃう」

「海賊っただけで十分捕まるって！」

「えっっ」

あからさまに嫌そうな表情をリヴィーは惜しむことなく曝け出す。と、そのまま首だけでローランの方へと振り向いたのだ。

「『えっ』じゃないって。これ常識」

「って、常識外の集団にそんな常識言われてもな……」

「だばらっしやい！！」

確かにこの世の中。海賊というだけで十分『常識』からは逸している。

ドリーチェの言葉に顔を赤く染めると、恥ずかしさのあまり、ローランは奇妙な手振りを添えながら叫んだ。

だが当のドリーチェはのん気にハーブティーをまた一つ注いでいる。ホレとそれを未だ平静を取り戻していないローランに渡すと、ドリーチェはぐるっと船内を見回した。

クルーの少ないリヴィー海賊団だ。見たところであと三人いるう

ちの一人　航海士の少年、 그리스しか今は姿が見えない。双子はどうやら船室でお昼寝といったところか。

よく見れば雨風に加え海水にまで曝されてきた船は、二年と少しの年季が見え隠れしている。そして船体の中央には動力源ともいえる大きな帆は中央で、風を受けてはふんわりと膨らんでいた。またその上には、海賊の誇りである海賊旗シヨリロジャが悠然とはためいている。

リヴィー海賊団の海賊旗は、下地に黒。しかし中心に大きく描かれているのは、白い骸骨マークではない。両刃の剣と羊歯シツの子葉。それらがクロスするようにして、大きく白く描かれている。海賊どもが喜んで描く骸と思しき文様は、何一つとして見当たらなかった。本当に彼らは、海族らしい海賊なのだ。

元々は別の海賊団にいたドリーチェだからこそ、それを真に感じることができる。そしてこの海賊団の良さも。

一つ微笑を浮かべながら、ドリーチェはふつと船体に背中を預けた。それから船頭近くにいる 그리스に視線を向ける。和やかにその瞳を細めると、ドリーチェは息を吸い込んだ。

「 그리스。お前も茶ア飲むか? 」

すると沖を眺めていた 그리스が小走りに駆け寄ってくる。

ハーブティーを飲んでいたリヴィーはその姿を見て、思わずへへと微笑んだ。

「急がなくてもドリーチェは逃げねえよ。どっかの誰かさんとは違うから」

「うわー。リヴィーちゃんってば酷い」

こいつと親指を向けられたローランは、間の抜けた声を垂れ流す。「いえ、そんなことはどうでもいいのですが」

だがそんな和やかさとは裏腹に、 그리스は緊張した雰囲気を感じていた。そんなこと扱いをされたローランは軽くしよげながら、年下二人の話し合いに視線を向ける。

「何かいたのか? 」

「一時の方角、沖に海軍らしき船体が」

「ちょうど真横か……」

十時の方角に向かっているから何とか逃げ切れるとは思うが、万が一のことがあれば元も子もないだろう。

確かにこの海賊団はほぼ剣士で構成されているが、どう足掻いてもクルーはたったの六人しかないのだ。こちらの腕がいくら立つたところで、海軍という大人数相手では不利になる。目に見えて解る結果だ。となればやはり、逃げるが勝ち、か。

ドリーチエに再度カップを渡してから、リヴィーは水平線を見渡した。

「この辺りに島 できれば無人島でもあるか？」

「そうですね。八時と九時の方角の間ですが、最果ての孤島・カンビアなら」

グリスはそう言うと、島のある方角を指差した。そこには水平線上、僅かに山のような砂色の突起が突き出ている。

進行方向をあまり反れず、しかも海軍とはほぼ真反対の方角が……。一度海軍へと目配せしたリヴィーは、カツンと靴底を甲板に打ち付けるとその顔いっぱい悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ローラン。あの双子どもを起こしてきてくれ。 さっさとんずらしようじゃねえか。海軍さんとはな」

『海賊の船長は、クルーに言い放った。

「俺がこの眼帯をつける理由なんてのは、一つだけだ。これが俺にとって海賊の誇りであり、最高の餞だからさ！」と』

幼い頃のリヴィーは、その本が大層お気に入りだった。毎晩毎晩飽きもせずとその本を読み更けては、小さな心を冒険の海へと赴かせていたのだ。

そしてこの海賊は最後、ある島へとたどり着く。いつも夜明けのような、暁と蒼闇あおやみとが交じり合う場所。長い尾を持つ金色の大きな鳥が宙を舞った時にだけ、それは現れるのだという。

島は常に緑に覆われており、そこには見たこともないような植物や動物達が集っている。そんな幻のような　そして最後の楽園が、確かに。

この世のどこかに、それは必ず存在する。

信じて疑わなかったリヴィーは、その思いを胸にいつか海へ出ることを誓ったのだ。

最後の楽園『ディファアラ』を求めて。

面舵を切り、白波を引きながら船は進んでいく。目の前に現れた孤島・カンビアはもう目と鼻の先だ。広がる緑の熱帯林。何かを囲んでいるかのように中央に聳える裸の山を、はつきりと確認することができる。

海軍はどうやら振り切れたようだ。もう船体は遙か遠方、水平線の先で沈んでいる。だが用心に越したことはないであろう。島の裏側に船を進めると、一行はそこからカンビアへと上陸した。

すると真っ先に、無人島ならではの静けさが彼らの耳を付いてく

る。聞こえるのは葉の揺れ合う涼やかな音と、さらさらとした漣の音。そして鳥の羽ばたいていく音くらいだ。他には何も、聞こえない。

威厳ある大自然の端っこに立ったりリヴィーは、思わず肌を粟立たせた。自分達なんて本当、ちっぽけな存在に思えてくる。そんな恐れにも似た感情が、今のリヴィーを苛んでいたのだ。

また彼らの足元に広がる白い砂浜もそうだ。

白い砂は陸を、そして海底を。それぞれを彩らせるためにずっと遠くまで、そのキャンパスを敷いている。

そのせいだろうか。砂の色はこれだけじゃない。そう解っていていながらも、この白い砂が小さな島だけでなく、どこまでもどこまでもつながっているかのように思えてしまうのだ。海と空の区別が付かないほどの青の中においてさえも砂の白だけは一つの線を彼方まで引いているものだから、なおさらに。

リヴィーは細い息をすうっと吐き出した。

ああ、世界は何と広いことが。

やがて帆をたたみ終えた料理人兼剣士の双子・シフォーリルとフイランデも、遅れて地上に足を付けてきた。二人が船から飛び降りると、白い砂がしゃらんと舞う。

「おはようさんです」

すると右足首に包帯を巻いた方、シフォーリルが短い黒髪を掻きながらやってきた。いかにも目覚めたと言わんばかりに、その蒼い双眸には涙が溜まっている。

「おはようじゃなくて、『おそよう』だろうか。お前ら寝すぎ」

「んな、いいじゃないの。だって俺達、育ち盛りなんだもん」

そう屁理屈を言うのは、左足首に包帯を巻いたフイランデのほうだ。シフォーリルとそれこそまったく同じ顔をして弁解を試みているが、まるで説得力がない。眠気眼ねむけまなこであるというのもその一因なのだろうが、何よりリヴィー自身も二十歳に及ばぬ十代後半。まだまだ育ち盛りのお年頃だからだ。

そつだ、そつだよ。こいつらはそついう奴だつたよな……。
痛くなる一方の頭を無理に落ち着かせると、リヴィーは「さいで
すか」と呟き、それからぐつと天を仰いだ。

「ま、それはいいとしてだ。まずはこれからのことでも決めようか」
「なになに。リヴィーちゃんつては何かいい案でもあるの？」

「ねえよ。てか今からそれを決めるんだろ」

人の話はちゃんと聞こうよ。

フライングをしたローランに即答すると、リヴィーは苦笑の表情
を一転。思案に眉根を寄せながら、砂浜をつま先で少しほじくつた。
「一応海軍が消えるまでは安心なんてできねえだろうな。あいつら
つては無駄にしつけえし。……でも奴らが一度姿を消すまでの平均
は、大体四、五日のサークルだろう。だからここに、長居はしない」
海軍はどうやら四、五日間隔で、他の隊と見回りを交代するらし
いのだ。となれば、その交代の瞬間だけは警備が手薄になる。

勿論そこで二つの隊に挟まれてしまえば、それこそ死を覚悟
する勢いなのだが、それでも狙うとすればここしかない。

いつでも危険と隣り合わせなのが、海賊と言う生き物なのだ。そ
れくらいの覚悟などとうに腹に決めている。リヴィーはそれを知ら
せると、もう一つと付け加えた。

「そこで問題が一つ。知つてのとおり俺達が調達してきた食料だつ
て長旅をする気もなかったから、せいぜい四、五日分つてところだ。
加えて次の島まで幾日かかるか解らない」

「死活問題だな」

「ああ。だから地形を探るついでに、食料調達もしてきた方がいい
と思つんだよ」

ドリーチエの言葉に頷いたリヴィーは、言うなり島の中央へと顔
を向けた。

「けど全員で行くのはさすがに無用心つてもんだろ？ 海軍もつろ
ついているみたいだし」

「残るか？」

「見張りや伝令を取っても、せいぜい二、三人はいた方がいいだろうな」

ドリーチェの問いに答えると、リヴィーは首を廻らせた。

ここにいるのは航海士と調理師と　あとは剣士といったところ。とりあえず航海士の 그리스 以外は皆剣の使い手だし、ドリーチェがこの海賊団に加わる前から既に、双子が料理を作っていたのだ。どこで区切ってもどうにかなるだろうが、とりあえず……

「ドリーチェ。お前ここに残れるか？　できれば俺の代わりに、ローランとフィランデの奴らをまとめてもらいたいんだが」

「こつちは平気だ。けど、……リヴィー達はどうかんだ」

視線を残らせる二人に向けたリヴィーに、ドリーチェは表情を強張らせた。

確かにリヴィーもシフォーリルも、剣術には長けている。自身の身は自身で守ることができるだろうから、何があっても生きては帰ってくるはずだ。だが剣を扱えない 그리스 を庇うとなれば、どうであろう。いくら剣術に長けるとしても、なかなか骨を折ることになりそうだ。となればこの中で最も剣の腕に長けるローランを連れていくのが懸命である。それに野宿をすることも毒を持つか否かを見分けられでもすれば、大抵生き延びることもできるのだ。

メンバーを考え直した方がいいのではなからうか。そう思ったのは何もドリーチェだけではない。誰かて腹の中ではそう思っている。だが心配無用とばかりに口端をニツと上げると、リヴィーは大丈夫だと自信あり気に呟いた。

「お前らも知っているとおり、 그리스 は立派な航海士だ。地理にはこの中で最も優れている。それにシフォーリルを選んだのだから、ちゃんと理由はあるんだ」

そう言うつとリヴィーはシフォーリルの腕を掴み、引き寄せた。

「こいつは最初、こう宣言して入団してきたんだ。『俺はあんた引っ付いて行って、世界一の料理人になってやるんだ』ってな」

二年以上も前、小さな港町で彼らは出会ったのだ。『海に出たい』

そんな馬鹿げた夢を抱いた者同士が集まって。

集まったのは結局、筆頭のリヴィーと見習い船大工のローラン。そして料理屋の息子のシフォーリルとフィランデしかいなかった。

航海士もいなければ、医者もない。考えてみればみるほど、海賊団を立ち上げるにはあまりにも無謀なメンバーだったのかもしれない。けれどそれが、良くも悪くも彼ら海賊団の出発点だったのだ。「今でも覚えている。その中で一番、シフォーリルの表情が輝いていたんだよ。俺はその意気込みと強い意志に惚れてさ。だから、どうしても連れていかなきゃって思ったんだよ。こういう経験も案外いいもんだろ？」

碧色の瞳を撫でられた猫のように細めると、リヴィーはおどけたように笑ってみせた。

「お前らだって敵が来たとしても、自分の身くらい自分で守れるだろう。それに優秀な調理師が二人もいれば、飢え死にをする心配もないだろうし。何より俺は、お前らのことを信頼しているんだからさ」

何ていったってうちの海賊団は、みんな自慢のクルーばかりだからな。

お前らだから安心できる。態度でそう言いきるリヴィーに、今まで心配で強張っていたドリーチェや他のクルーの顔から、ふつと力が抜けていった。その時こそまるで、リヴィーが常夏の陽光にさえ勝る輝きを纏っているかのように、彼らの目には映っていたのだ。深く深く目を瞑ると、ドリーチェはその口元に微笑を浮かべる。

「解った。そこまで信用されているんじゃ、無下むげに断るわけにもいかねえよな」

そよ風が木々に囁きかけていった。繰り返して打ち寄せてくる波の音も静かで、海鳥が一羽、遙か上空へと飛び立っていく姿が臉裏に焼きついていく。

「船長がいないと成り立たないっていうこと、よく覚えておけよ」「ははっ、そりゃそうだったな」

羊歯の子葉は『始まり』と『創造』の象徴。そして剣は『野心』と『自己実現』の象徴。

髑髏なんて使わない。そんなおかしな団旗の下で、彼らは壮大に笑いあつた。

一度茂る熱帯林へと足を踏み入れれば、そこに広がるのは壮大なジャングルだった。そこかしこに蔦が垂れ下がり、時折それに混じって蛇などもぶら下がっている。

足元はスコールに見舞われたのであろうか、それとも単に陽光が届かないだけなのだろうか。ぐちゃぐちゃとは言わないまでも、踏めば明らかな湿り気を帯びていた。踏んだ土は苔や雑草と共に、キシキシと奇妙な音を上げているではないか。

身に纏わりつくような嫌な湿気に頬を撫でられ、時折聞こえる鳥類の羽音が遠く木霊する。苦しさを思わせる枯れた鳥の鳴き声が、嫌に耳を突いてきた。

「なんつーか……、色々と半端ねえな」

だがそんな状況とは裏腹に、どこまでものりにノッているシフォールルの声に後押しされながら、リヴィーはボソツと呟いた。

音程は端から無視。そして何より声を張り上げただけの歌が、深いジャングルの中に吸い込まれていく。シフォールルはそれを嬉しそうに口ずさみながら、口調同様に嬉しそうな表情を先行く二人に向けた。

「えー、そうか？ むしろ俺的にはデンジャーで、すっげえ楽しいけど」

「デンジャーってな、お前。それってもろに危ねえじゃねえかよ」
「てめえアホだろ？ そう聞き返すリヴィーに、先頭を歩くグリスマつられて苦笑した。

「確かにスリルがあるのも楽しいとは思いますが、危険すぎるのは御免ですね」

「何だよ。お前らつてばつれねえな」。それでも一端の海賊なわけ

？」

大木を飛び越え鳶に手をかけると、ひょいっと軽い動作でシフォールルは叢ぶくに着地する。足元で何かが、ぴよんとどこかに向かつて跳ねていった。

青い雑草の海を進むリヴィーは、そんな緊張感の欠片もないシフォールルにふいっと振り返る。その瞳には明らかに苦笑をも通り越した感情が浮かんでいた。

「あのなあ、俺たちは別に楽しみにきたわけじゃないんだよ。解りますか、この意味。……っておいゴルア、シフォールル。テメエ一体何やってんだよ」

叢の中、無邪気にしゃがみ込むシフォールルに、リヴィーは思わず問いかけた。と同時に、行く間際にドリーチエにかけられた心配そうな声色が、脳裏にありありと蘇ってくる。

無理だ。こいつ無理だ。シフォールルは俺の手に負えない。

「ん？ 何ってこれ」

言いつつ叢の中から立ち上がると、シフォールルは手中にある物をリヴィーの前に押し付けてきた。

「何か解んねえけど、すげえよこいつ。『ぎよえー』ってな感じで鳴きやがる」

えへへっと実に楽しそうに、シフォールルはそれを見て笑った。

シフォールルの手中に収まっているもの。それはほとんどないような首根っこを掴まれた、一羽の鳥だった。必死に逃れようとしてじたばたともがいている。鳴き声は『ギョエエエエエエー！』で間違いなさそうだ。

その鳥は全身をライトグリーンの羽に包まれている。たまご型の身体に申し訳程度についた瞳や嘴くちばしや羽が、なんとも愛らしい姿だ。それ故に、鳴き声のギャップがあまりにも激しいのもまた事実であるのだが。

「お前、それ放してやれよ！！ 何か俺、無性に悲しくなってきたぞ！ 罪悪感で心が潰れそうぞぞ！ 鳴き声『ぎよえー』だけどッ

「！」
「そうですね、シフォールルさん！ 『ぎよえー』 でもみんな生きて
いるんですよ！ ……いえ。『ぎよえー』 だからこそ生きてい
るんですよ！」

しかしその鳥の居た堪れなさに、二人は制止を求める声を上げて
いた。熱弁をするあまり、リヴィーもグリスマも『ぎよえー』 なぞと
連呼している。傍から見れば、かなり怪しい光景だ。

勿論、鳥の鳴き声自体もその怪しさに拍車をかけているのだが、
何よりも焦るあまりに、二人が正論になっっていない正論を必死にな
って述べ続けているあたりが特におかしい。

「でもさ、こいつ何か良くない？ それに見た目、うまそ」

「んなああああ！！ ちょっと待てえい！」

「食べる気なんですか！？ こんな円らな瞳の子に、そんなことし
ちゃうんですか！？」

リアルにシフォールルがこの鳥を鍋に突っ込む姿を想像してしま
った二人は、シフォールルの言葉半ばに悲鳴をあげてしまった。鳥
も何かを悟ったのだろう。鳴くのをやめた姿は、どこか震えている
ようにさえ見える。

「けどさあ、地形探るついでに食料を調達しに来たんだろ。どっち
みち俺は料理人だし」

だから持って帰る！ とシフォールルは好いおもちゃを見つけた
子供のように、高らかと宣言してきた。

シフォールルを除いた二人と一羽は、血の気の引いていく感覚を
覚える。脳に酸素が行き渡らなくて、軽く頭痛がするのは何も気の
せいではないだろう。

上手く逃げろよ。

同情の視線を向けたリヴィーとグリスマは、鳥に心からそう願った。
俺達なんて一食抜いても、何とかなるんだからさ。

どうもシフォールルの鳥に対する愛着心は、別の方向へと働きを

変えたらしい。最初こそ「美味そう」などという発言をしていたものの、いつの間にか鳥の名前を考えては、張り巡らされる木の根に躓いてを繰り返している。

あの鳥もどこかシフォーリルに懐きつつあるようだし、と後目に見ながら、リヴィーは黙ってその経過を見守っていた。実は心の底で、それを楽しんでいるのかもしれないが。

「うっし、決めた！ こいつの名前は今日からギョギョな！」

「ギョギョ？」

「何だよ、その変な名前」

首を傾げる 그리스 に続き、リヴィーは顔を顰めながらそう呟いた。「だってこいつ、『ぎょえー』って鳴くじゃん。だからギョギョなの！」

そんな批判にむきになると、シフォーリルは命名の理由を口にする。けれどもリヴィーにはネーミングセンスがないと馬鹿にされた。するとキュツと自称・ギョギョを抱えながら、シフォーリルは頬を膨らませる。

「じゃありヴィーは何て名前をつけるわけ？」

「は、俺？」

「そーだよ。批判するなら、何かしらの案があるんだよな」

たじろぐあまりに倒木から誤って足を滑らせたリヴィーは、その拍子に頭を打ちつけてしまう。しかしその頭の中も、今は鳥の名前のことでいっぱいだ。痛いと思う暇もない。

えーっ、とりヴィーは苦い声を上げた。どんなものがあるんだよ、名前って。そもそもにして俺、ペットなんて一度も飼ったことねえし……。

苦しい言い訳ばかりが、口から漏れそうになる。だがそれを瞬時に飲み込むと、なんだろうなーとりヴィーは足元の草を引き抜いてはもてあそび、頭を悩ませた。

それからリヴィーは混乱のあまり、視線を前に向ける。その少し遠くには 그리스 の姿があった。だが 그리스 に助けを求めなかったの

は、単に先打って小首を傾げられてしまったせいだ。本当ならば、頭を下げてでも名前を付けてもらいたいのが正直なところ。

それでもリヴィーは懸命に頭を働かせると、奥歯を噛み締めながらぼそりと唇を動かした。

「……ギヨンザレス」

「は？」

「だからギヨンザレスだって！」

聞き返されたことに躍起になって、リヴィーはその名をおもいきり吐き出した。

だがあからさまにどこか異常な人を見る視線を、リヴィーは彼らに注がれてしまう。頬がカツと熱くなるほどの羞恥心。耳の奥が、キンとした。

「だって『ぎよえー』なんだから！ 『ギヨ』を使って名前を作るんだろ！」

「いや、誰もそんなこと言ってないし」

「うっせー！　つかそんな哀れみに満ちた視線を注いでんじゃねえよ、テメエら！」

ガバツと頭を上げると、リヴィーは「何見てんだよ！」とどもりながら辺りを見回した。

一方ギヨギヨはシフォーリルの肩の上で、どこか焦ったようにギョエエと鳴く。どうもご不満のようだ。

「やっぱギヨギヨにしようや、リヴィー」

勝ち誇ったとばかりに、シフォーリルはにいつと深い笑みを浮かべる。

「好きにすりゃいいだろ！」

顔から火が噴くほど恥ずかしい思いをしたリヴィーは、声を荒げるとそっぽを向いて拗ねてしまった。

もう動物の名前なんてつけるもんか。

後頭部をがりがり掻き回すと、リヴィーはそのまま倒木に背中を委ねた。湿った木の香りが、鼻腔を微かにくすぐってくる。

いつそのこと、このまま寝てしまおうか。

リヴィーがちょうどそんなことを思った矢先、かさかさという足音が近づいてきた。

「リヴィーさん！」

それはどうも先頭に立っていたグリスのもののようにだ。少し先を行っていたグリスがこちらへと戻り、そして進んでいたのとは別の方向を指さしている。

「何？ 変なものでもあったか？」

精神的に疲れた顔をしていたリヴィーは眉間にその名残を浮かべていたが、その重たい腰を上げると、先行くグリスの方へと歩み寄っていったのだ。そこで明かされていく、ことの全貌。グリスの指さす先、視界に入ったのは

「……へえ。そういうこと、か」

疲れは一気に、その顔から引いていく。思わず絶句してから苦々しく、そしてどこか面白そうに。リヴィーは額に浮かんだ汗を拭いながらそう呟いた。

眼前には目に見えるほどはつきりとした道が、草木を掻き分けては遠く彼方へと続いている。獣 それもそれなりの大きさをしたものが通ったと見て、まず間違いはないだろう。一人が通るには十分と言えるだけの草が薙みである。草が起き上がらないふうを見ると、相当頻繁に使われているのか、もしくは最近ここを何かを通ったのか。

どちらにせよこの先を辿っていけば、何かがあるはずだ。それに運が良いのか悪いのか、その道が示す先は、向かっていた岩山と同じ方角。

避けて通るにや男が廃る。

ぐつと拳を握り締めると、リヴィーはハツとぎこちなく笑ってやった。

「でっけえ獣に襲われても、文句は言えねえよな」

その表情には挑戦じみた影が浮かんでいた。

突き進めども突き進めども、岩山は一向に近づく様子を見せなかった。小さい島だと思っていたのだが、予想以上の規模だったらしい。今ようやく島の中頃に立ったのであるうか。もう太陽は天高くに悠々と居座っている。

また多量の湿気と降り注ぐ太陽光が、三人の足を鈍らせていた。額に浮かぶ汗はいくら拭おうとも滲み出てくる。輪郭ををなぞり顎にまで伝ってきた汗を、リヴィーは乱暴に拭い取った。紅潮した頬。吐く息は徐々に熱を帯びていく。表情は不安に翳^{かげ}り、だがそれでも力ある視線だけは、ずっと前方だけを見据え続けていた。

とはいえその保たれた状況がずっと続くかといえ、それは否。不安は一層の不安を連れ、強かった視線も何か得たいの知れないものに支配されてゆく。いくらプラスがあるとしても、多量のマイナスを抱え込んでしまえば、いずれマイナスになってしまふ。それと同じようなものなのだ。

最初はどれだけのパワーに満ち溢れていても、いずれ墮ちる。この結果はいわば、悲しいほどの必然なのであろう。

「迷ったんじゃないの？」

そして最初にその事態を動かしたのは、小さなシフォーリルの声音だった。

ハツと息を呑み、振り返る二人。シフォーリルの肩に乗るギヨギヨも主の顔を心配そうに覗きこんできた。一瞬の沈黙が、辺りを不穏に漂い続ける。

「正直なところ、それは解りません。けれど僕らはずっと、あの山だけを目指して歩いているんですよ」

感情を抑えた声で、グリスはそう説明した。

誰も脳裏によぎる『迷った』という言の葉。それに肯定も否定もせず、グリスは茶の髪をかきあげながらそう答えたのだ。

掻きあげた拍子に飛ばされた幾多の汗が、雫となっては地面に降り注いでいく。

「迷うはずがないです」

そして誰にも振り返らずに、 그리스はそう断言した。凜と、はっきりとした声で。

「本当にそう言いきれるのか？」

だが即座に聞き返したのは、やはりシフォーリルだった。今にも爆発しそうな気持ちを無理にしまいこんだ言葉には、やはり計り知れない棘がある。

「……どういう意味です」

「だってお前だって、どう足掻いたところで人間だろ？」

罵に手をかけた 그리스は、震える唇をきゅっと引き締めた。確かにシフォーリルの言うよう、 그리스は人間だ。そして人間だからこそ間違いを否定したくなる時だってある。

そう、シフォーリルの言葉はつまるところ『その言葉も自己暗示にすぎないんじゃないのか』と問いかけているのだ。そしてそれは、 그리스の身にも宿る気持ちだった。これはただの自己暗示なのではないか、と。

それでも 그리스は一端の航海士だ。航海士という地理的な面で人命を預かる役職。それに就いていながら迷うなど、そんなことは許されるはずもない。

ましてや今いるのは誰も住まわぬ無人の島。人がいようと見知らぬ島とは危険に思うものなのだ。こんな助けも呼べぬ場所で迷うなど、まさに命を落すに等しいこと。だから自然と『迷っていない』と思い込んでいるのではないだろうか。そのマイナスの念が、より一層強くなってくる。

그리스は生唾を飲み込むと、もう一度汗を拭った。視線を俯かせながら、再度口を開こうとする。だがそこから出るのは、果たしてどんな言葉であろうか……。

「お前ら、一回落ち着こうぜ」

すると見ていられなくなったりヴィーが、とうとう二人の間に割り込んできた。颯爽と意識下に現れた船長の姿に、二人の双眸には

僅かな正気の光が戻ってくる。

「確かに俺も思った。変だよ、ここ。だって進んでも進んでも、全然進めていないんだからな。……けど、それに対して 그리스 に非があるかって言えば、そんなことはないだろ？」

間に立つリヴィーは、二人の顔を交互に見やった。そして彼らの肩に手を置きながら、リヴィーは深くシフォーリルの瞳を覗き込む。蒼いシフォーリルの瞳は気まずそうに下を見据えると、「ああ」と掠れそうなほどの声で呟いた。

「それに 그리스 は間違いなく、あの山目がけて突き進んでいる。…違つか？」

今度はそう言いながら、 그리스 の瞳を覗き込む。と、リヴィーは震える 그리스 の背中をあやすように軽く叩いた。

迷ったかもしれない。だが山を目指していなかったかと聞かれれば、そんなことなどあるはずもないのだ。唇を真一文字に引き結んだ 그리스 は首を横に振ると、「いいえ」と一言だけ、苦しそうに吐き出す。

その姿を見たリヴィーは緊張していた視線を解くと、そのまま無遠慮に二人の肩に手を回した。シフォーリルの肩に乗っていたギョギョは羽ばたき、代わりにリヴィーの腕に乗っかってくる。突如引き寄せられた二人はバランスを崩し、前のめりになつては足をその場に踏み留めた。

軟らかな土の抉れる感触。ふわりとした覚束ない足元。その感覚とリヴィーの行動に、二人は思わず目を丸くする。

「なあ、解るだろ。俺達は少ない仲間なんだ。たった六人の、小さい海賊^{かぞく}」

リヴィーがそう言うと同時に、優しい風が囁きかけていった。それはくるくると宙を舞うと、やがて悪戯に三人の髪を混じらせていく。短い黒色、短い茶色。それらを取り巻くようにして、長いブロン

ト
「考えてもみる。俺達がそいつらを信じないで、一体何を信じれば

いい。そんな状態でどうすれば最高の航海ができる」

そんな中言い聞かせるように、リヴィーは一つ、またひとつと言葉を紡いでいった。無意識のうちに二人は顔を俯かせ、静寂はそこにひたりひたりと浸透していくかのよう。

だがそれを解くようにして、リヴィーは二度ほど二人の肩を叩いた。そこに浮かんでいるのは怒りでも悲しみでも、ましてや絶望でもない。それはどこまでも華やいだ笑顔と、溢れんばかりの希望を宿した瞳の碧だった。

リヴィーのそんな表情に、二人は思わずきよんとする。

「だからさ、心配なことがあつたらひとまずは俺に当たれ。なんてつたつてここの船長は俺だからな。包み隠すことも躊躇ためらいも、そんなの何一つとしていらない」

だつて俺達、家族だろう？ そう言つとリヴィーは二人から手を放しながら、肩をすくめて見せた。

「それに俺達は今、ごたごたしている余裕なんてねえだろう」
するとリヴィーは続いている獣道の奥を、そうつと指さした。茫然とした表情を浮かべていた二人は、揃つてリヴィーの指す方向へと顔を向ける。

……と、そこには映えるブロンドの長い髪。軽くウェーブのかかつたそれは、艶やかな天使の環を輝かせている。見た者をその場で石に変えてしまうほどの、美しい髪だ。

だが美しいのは何も髪だけではない。零れてしまいそうなほど大きく円らかなのは、澄んだ浅い海の碧に深海を思わせる瑠璃色のオツドアイ。それを縁取る睫まぶたはしなやかで長く、すらりとしている。花崗岩こうがんのように輝く白い肌の、その中でも頬だけはうっすらと赤らんでいた。中央には小さな鼻と、ふんわりとした幼い唇があり、それがまあい小さな顔の中に、綺麗に納まっているのだ。

また身に纏っているのは、レースをふんだんに使つた萌黄色もえぎのドレス。膨らんだ袖から見える腕もやはり白く、触れれば壊れてしまいそうなほど細い。

狭い肩幅は可愛らしさをより強調しているようで　だがこちらに気付いたのか、振り返ると紅い靴を鳴らしながら、とてとてどこかへ去ってしまったのだ。

「……何で、女の子がこんなところに」
呆然としたためか、覇気のない言葉がグリスの口から吐き出される。

それもそのはずだ。何せここは無入島。それも大海原の端、絶海に浮かぶ孤島なのだ。こんな途轍とつもない場所に、どうして年端も行かぬ少女がいよう。しかも瞳はオッドアイときている。

唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。ずっとそこから視線を放さないでいる二人を促し、リヴィーは先をたって歩き出す。

「行ってみようぜ。こんな幻想ファンタジーに出会えるなんて、きっと俺達は幸運だ」

無人の孤島・カンビア。そこに眠るのは、何よりもおかしな不思議なのかもしれない。

向き合い、頷く二人のクルー。それをしかと目にすると、謎の少女を追ってリヴィーは先を急いだ。

少女を追いかけているはずなのだが、その距離はある一定の間隔以上詰めることができなかった。ましてや相手はふわりと広がったドレスだというのに、大の男と同じ速度で走っている。

とんだお方だ。リヴィーは眉根に皺を刻むと、苦笑した。

「なありヴィー。いきなり包み隠さないでいいかな」

すると後からは、ついて来るシフォーリルの声が聞こえてくる。

「ああ、何でも言え。俺は寛大だ」

「あのお方って、もしかしなくても……」

「ブロンドの髪に、オッドアイ。間違いないリアン王女だろうな」

だが、何でそんな大層なお方がこんな離れ小島にいるのだろう。

航海士でもいればそれも十分に可能だろうが、彼女以外に誰かがいる気配はまったくしない。一人で来るにはあまりにも危険な地だ。

しかしそれよりも不可解なのは ……

「だとしたらあの姫様、何でまたこんなところを選んだんだろう。こんな何も無い、隔離された場所を」

濁るシフオーリルの声音。

「さあな。隔離されているから選んだ。つてのも考えられるんじゃないの？」

「何らかの理由で漂流した可能性は？」

グリスの問いにさえ首を振ると、リヴィーは口端を歪めながらも持ち上げた。

「漂流だあ？ それにしちゃあ身なりが整いすぎているじゃねえの」
いや。そもそもにして二年半もの時間が過ぎているのだ。汚れのないドレスに、ふわりとウェーブがかつた髪。漂流でないにしろ、その身なりは異常なのではないだろうか。

いきなり現れた曲がり角を、三人は止まりもせず駆け抜けていった。一旦視界から消えた王女は、またもや三人の前で踊るように駆けていく。

クソツ！ とリヴィーは吐き捨てた。一体ここで、何が起きているんだ。

「リヴィーさん！」

「解っている」

示すグリスの視線の先。またもやあの王女は軽やかな足取りで、急な角を曲がっていったのだ。負けじと重たい足を速めるが、そのせいで幾分、遠心力に負けそうになる。身体がふらついた。

それにしても速い。咽に絡みつく息をやつとの思いで吐き出しながら、更に一步とリヴィーは力を入れた。

あの王女はスピードを落すどころか、足取りに似合わぬほど、ますます速くなっているのだ。

萌黄色のドレスが踊るように視界から消え、彼らが角を曲がれば更にその向こうの角へと消えていってしまう。体力自慢の青年でさえ息を切らすのだ。そのスピードは尋常でない。

これが長年王宮にいた姫の体力かよ。

心中で毒づきながら、リヴィーは目に入った汗を腕で拭いた。心臓は破れんばかりに脈打っている。

「本当にとんだ幻想だぜ」^{ファンタジー}

現実なんて、きつとどこかに忘れてきてしまったのだろう。今はただ、このありのままを受け止めるしかない。そうでなければ気が狂いそうだ。

蒸し暑いジャングル。纏わりつく湿気が固まったのではあるまいか。思えばいつから、浮かんでいる汗がこれほどの量になっていたのだろう。

霞む脳裏。それを振り払いながら三人はただひたすらに走った。一体どれほどの距離と時間を走ったのかさえ最早解らないほどに、紅い靴を履いた王女を追いかける。それだけが彼らに今与えられた任務であるとも思っているかのようだった。

とはいえこれだけの困難があれば、嬉しい知らせも飛び込んでくる。あれだけ遠かった岩山が、もう目と鼻の先。手を伸ばせば届きそうな場所へと近づいているのだ。つまり、それだけの道のりは辿ったということになるのだろう。

勿論その分、頭上高くあった太陽は今やジャングルの木々の合間からでしか窺うことができなくなっているのだが……。

そろそろ夕暮れが近づいているのだろう。今はまだ今は蒼い空を見上げながら、リヴィーはぼんやりとそんなことを思った。なるほど。小腹が空くわけだ。

するとまた、王女は角へと消えていってしまう。もう何時間にも及ぶであろう、長い長い追いかっこ。これの終止符は一体いつになったら打たれるのだろうか。

「ふ……ざけんなッ!!」

海賊様をなめんじゃねえ!

最後のひと踏ん張り。本日幾度目かの角を曲がった王女に負けてたまるかと、リヴィーは身体を滑り込ませながら道を曲がっていく。

……が、そこに見えたのは。

「ちよつ！ 待ち、い……」

叫び急に立ち止まったリヴィーに、勢い余ったシフォーリルがグリスが、次々に突っ込んでいった。前のめりに地べたへと倒れこんだ三人は、夕の淡い明かりに照らされる。

「い……つてえじゃねえかよ、シフォーリル！ テメエ、俺を殺す気か！」

「つてか、急に立ち止まるリヴィーの方が危ないんだって！」

圧しかかる二人を跳ね除けると、リヴィーは食いかかるような勢いで、真っ先に突っ込んで来たシフォーリルに詰め寄っていく。文句を言うのはこの口かッ！ と昼間のローラン同様にリヴィーはシフォーリルの頬を抓ると、抓んだままに顔を上に向けさせた。

痛いという言葉を何度か吐かせて、それからシフォーリルの頬を放す。するとグリスが控えめにリヴィーの元へとやってきた。その表情にははつきりとした戸惑いの色が浮かんでいる。言うまでもない。自らを取り巻く状況に対しての。

「リヴィーさん。この状況って、……どういことですか」

「とんだ幻想がくれた贈り物、つてか。そんな長い時間、走ったつもりじゃなかったんだけどな」

先ほどまで広がっていた蒼い空は、どこへ消えてしまったのだろうか。見上げた先。そこにはもう茜を越え、その大半を瞬く幾億の星とダークブルーとが彩っていた。夕刻の印は、もうほとんど残っていない。あるのは夜の象徴。透きとおった闇ばかりだ。

しかも、と加えてリヴィーは深いため息を吐いた。

「あの姫さんは、相当に体力が有り余っているらしいな。見失ったよ」

まさかそんなことが起こるとも思わなかった。どうしてあのような動きにくい服を着ている少女に、七部のズボンにノースリーブという身なりの青年男子が揃いも揃って負けようか。

一国の しかも王位継承者がこんなところにいるのも不可解な

ことだが、何よりも姫様の尋常ならぬ体力の方に、リヴィーは驚いた。もつとも不思議に思うことは、更に根本的な部分からあるのだろうか。

ぐるりと辺りを見回す。夜空に彩られたそこは、当たり前だとばかりに、全てを闇色に染め上げていた。

そして眼前すぐのところには、やつとの思いでたどり着いた岩山が高々と聳え立っている。莊嚴そうつしんといおうか、それとも空虚といおうか。そんな雰囲気をかもし出していた。

また振り返れば、辿ってきたばかりの獣道とジャングルが不気味なほどに広がっている。そのくせやはり、昼間同様何の鳴き声も聞こえてはこない。他の島ではうるさいほどだった梟フクロウの鳴き声でさえも、この島では聞くことも叶わないのだろう……。

どうしようという思いが、三人の胸中に駆け巡る。ギョギョも空気を察したのか、鳴くことをいつの間にかやめていた。

深まるばかりの嫌な空気。だがそんな中でそれは、突然視界に飛び込んできたのだ。

「なあ、オイ。これ……」

そう言っつてリヴィーが覗いたのは、今まで立っていた場所から四五歩ほど進んだところであろうか。背丈の高い草で見えなかったが、そこにはぼつかりと口を開いた洞窟が、あの岩山の奥深く目掛けて続いているのだ。

やрий。とりヴィーは思わず口端を歪めた。残る二人もその意味を悟ったのか、その顔に今まではなかった笑みを湛えている。

王女を見つけて　それから何をすかかなんて解らない。海賊である自分達が王女を連れていけば、それこそ王家や海軍から罰せられるだろうし、最悪極刑という事態もありうるだろう。そんな状況に置かれると解っついてもなお、三人の心が揺るぐことはなかった。狂気か、それとも乱心か。ともかくそれは、異常ともとれる状況だったのかもしれない。それなのに高鳴る鼓動は、どうしても抑えようがなかったのだ。

「お手並み拝見といこうか。こんなところで引き下がるほど、俺達
はか弱く育ってねえんだよ」

さらさらと夜風に流されるブロンドの長い髪。それを一度掻きあげると、リヴェイはくるっと振り返った。

「行くぜ、野郎ども！ 今日最高の一日になりそうだ」

その隻眼に輝いていたのは、淡い月明かりだけではなかったのか
もしれない。

十

『しかし海賊の船長は、クルーに一つ、忠告したのだ。いいか。この島には奴がいる。奴に会ったら気をつける』と。クルーは一樣に声を上げだした。

「何が起るっていうんだよ」
すると船長は声を潜め、こう言ったのだ。

「この島にはな、とても恐ろしい奴がいる。奴はギリユアという名を持つ妖精なんだがな、そいつは名前ばかりで姿はなく、いつもいつも人の心を盗み見ているのさ」

ランプの火が、さっと揺れた。影を揺らすその光景に、誰もが息を呑む。

「人の心を読んだギリユアは、たちまちに姿を現してきやがる。その姿は何と、心を読み取られた奴の、もう一つの姿なんだ。別の人生を歩んでいた場合の、そいつの姿に化けてきやがる」

それはそれは恐ろしい。どんな兵でも、その姿には卒倒するってんだ。

「だから気をつけな。奴に心を読み取られないようにな」

そう言つと船長は、島の中へと歩んでいったのだ」

海賊は多くの苦難を乗り越えていった。その中でもっともリヴィーをはらはらさせたのが、この『人のもう一つの人生に化ける妖精』の存在だった。

いつもいつも、たとえこの先の展開が解つていようと。リヴィーは話の続きに興奮したものだ。本を持つ手に汗を握り、吐く息も荒く次のページをめくっていく。幼い心での、最大級の冒険だったのだ。

まだ船でどこかへ行くことはできない。けれどいつかは、海へと飛び立ちたい。

そんな思いを馳せながら、この海賊に身を投じては本を読む。狭い世界で生きたりヴィーの、これが思えば始まりだったのかもしれない。

海へ出よう。

そう決意した、全ての。

洞窟の中はまったくの闇というわけではなかった。苔だろうか、それとも何か寶石でもあるのだろうか。壁は所々月明かりのように、淡く蒼く光り輝いている。

また右手には川でも通っているのだろう。その水面に光がキラキラと反射して、余計に明るみを増していた。

ただそれでも暗いことには変わりない。輝く光は星のよう。まるで新月の真夜中にでも迷い込んだかのような、妙な感覚だった。どこかでぴちゅんと、雫が落ちる。

「なあ、……妙だと思わねえか」

言いながらリヴィーは、水に湿った岩壁に手を這わせた。

互い顔を見合わせたシフォーリルとグリスは、首を捻ると再度真正面を向く。

「何がですか？」

「んー、全部」

答えになっているのか、いないのか。という言葉を口にしながら、リヴィーは水音を立てながらとんとん歩いていく。

「だって考えてもみるよ。俺達は昼前に、この島についた。そうだろう？」

リヴィーの言葉に、二人は無言で頷いた。横目にそれを確認したリヴィーは、更に続ける。

「それから三人に船番を任せて、俺達だけで地形探りに出発した。ちょうど昼頃だ」

そこで見つけたのが、シフォーリルの肩に乗っている、このギョギョ。太陽はその時、真上にまで昇っていた。そうリヴィーは記憶している。

「昼を少し過ぎた頃、俺達は獣道を見つけた。森に入って、小一時間してからのことだ」

湿った空間。水音は絶え間なく響き、川のせせらぎは下流へとひたすらに走っていく。

一度歩みを止めると、リヴィーは二人の方へと振り返った。

「問題はここからだ」

そう言うとりヴィーは少し声のトーンを下げる。深刻そうな色は、そこ以外にもじわじわと溢れ出ていた。

「それからも俺達は歩き続けた。けれどいつまで経っても、この岩山に近づけなかつたんだ。おかげで二人は揉めてしまう。そうしたら王女が、どこからともなく現れてきた」

その時のことを、リヴィーは鮮明に覚えていた。今まで何もなかった獣道に、突如としてリアン王女が現れたのだ。それはまるで、疾風の如く。

「俺たちは王女を追った。やっぱり昼を少し過ぎた頃だ。けれど王女を追ってここまで来た時には」

「既に日は暮れ、夜になっていた」

グリスは呟き、思わずリヴィーの顔を凝視してしまった。

何かがおかしい。けれど何かがおかしい？

真意が解らないが故に、もどかしい思いに駆られた。しかしそれは、すぐに結論を出される。

「なあ。俺達つてばそんなに長い間、走っていたか？」

二人を見つめ、紡ぎだしたリヴィーの言葉が、狭い洞窟内で反響した。思わずギョツとした二人は、目を見開いてリヴィーを見やる。壁に置いたリヴィーの手は、微かに震えていた。

「確かに俺達は王女を追いかけて走っていたさ。王女は足が速いからな。一度止まれば置いていかれるだろうと思って」

と、岩肌を掴むリヴィーの手に、思わず力が籠る。その表情が見えずとも、一体何を抱いているのかは、大いに想像がついた。

彼は今、困惑している。

「本当は気付くべきだったんだ。まんまと騙されたんだよ、俺達はだつて、どうしてこんな島に一国の王女が一人でいるんだよ。おかしいだろ。王宮から出ることなんて早々ない人が、どうしてこんなところで無傷のまま走っていられる」

木霊していく悲痛な声。

「それに考えてもみる。ドレスを着た少女が、あんなに速いわけがない。しかも俺達があんなに長い間、ずっとペースを落さずに走っていられるわけがないんだ」

根本に戻り全てを考えてみる。すると太陽の高さから考えても、王女と会ってからその時間は、ゆうに六時間はあるだろう。まずそれだけの時間を少女が走っていたら、おかしいのだ。そしてそれだけの間を全力で走っていた己たちもおかしい。

それとも、だ。超常現象が起こり彼らの周りだけ、何か時間の方が気をおかしくしたとでも言うのだろうか。真相は知れない。けれどこれだけは確かな事実だった。『全てがありえないことだ』と。

すると不意にゴンと、箆った鈍い音が洞窟内を駆けていく。リヴィーの振り上げた拳が、剥き出しの岩肌を叩いたのだ。

気が狂う。そう思った己を引き止めるための、自傷行為だったのかも知れない。叩いた拳からは僅かに、赤い液体が滴っていた。

「リヴィーさ」

「本当はありえないんだよ。何もかも……」

グリスの言葉を遮るなり、リヴィーは岩肌で切った掌を憎々しそうに見つめた。まるでこんな物などいらなかったとでも言うかのよう……。

あまりの淀んだ空気に、グリスとシフォーリルは息を呑んだ。どんな時であろうといつも明るく振る舞い、誰にも弱音を吐かなかった。それがこの海賊団の船長だったのだ。

こんなに取り乱したリヴィーなんて、彼らは一度として見たことがない。

憎悪に歪んだリヴィーの表情が、この闇の中でさえはつきりと確認することができた。

「なあ、お前ら」

未だに輝きを増す、数多のエメラルドの光。

それはちろちろと揺れる水面に反射し、三人の面影を揺らしていく。

数歩離れて歩みを止めている二人に向けて、リヴィーは消え入るほど小さな声で呟いた。

「ごめん」

弱音にも似た謝辞がリヴィーの口を滑っては、隣に流るる水面へと落ちていく。

俺の判断が甘かった。そしてこんなことに巻き込んでしまったことに、悲しみを感じる。

けれど落ち込むのは、ここまでだ。

心機一転。キツと眼前を見据えると、リヴィーは言葉なしにどこまでも続く闇を射止めた。

これからだ。これからがこの物語の本番だ。

己の魂に言い聞かせるように、その一字一句をリヴィーは飲み込んだ。そして髪から指から　そして骨の髄に至るまで、余すことなくその決した意を浸透させてゆく。

行ける。俺達なら紡げる。

やるべきことをやってこそ、真の海賊だ。そして旅に困難はつきもの。

さあ、何かを落すのはここまでにしよう。

輝く光に映し出された鮮血を拭くと、リヴィーはその手を一つ払った。紅い雫が、暗い宙を舞っていく。

だが無情に、もその時振り払ったのは苦い私情だけではなかったのだ。

「行くぞ」

そう振り返ろうとした最中、突如として湧き上がったのは何かが水に落ちる音。

首を廻らすとリヴィーの目の前には、それこそ色鮮やかに染め上げられた翠の水柱が輝きに満ちて立ち昇っているのだ。

あまりの光景に、リヴィーは目を見張った。

だが彼らが立ち竦んでいる間にも飛沫は顔を身体を濡らしてゆき、やがてはその背をみる間に小さくしてゆく。

飛沫の上がる音は、尾を引きながら消えていくかのようだ。辺りはなんととも言えぬ静寂感に包み込まれる。

何が、起こった？

リヴィーの脳裏にその言葉がよぎった時は、既に水柱がその背を水面に帰した後だった。

そしてその奥に見えたものは……。

「グリスが ツー！」

リヴィーは思わず、身体を擦った。

グリスがない！

飛沫のその奥には、リヴィーとシフォーリルとを隔っていたグリスの姿がなかったのだ。

ただ自らと同じ、驚きに染まったシフォーリルの顔だけが、リヴィーの目に映し出されている。

冗談じゃない！ こんなところで仲間を失ってたまるものか！

ぐるつと振り返ったリヴィーは迷うことなく、自ら水面へと飛び込んでいった。

しかし身体に纏ったのは、思っていた以上の水の冷たさ。そして追い討ちをかけるかのように、先ほど作った傷がリヴィーに激痛を与えてくるのだ。

それこそその痛みといったら、全身が脈打ち締め付けられるかのように、痛くて苦しい。肺は諦めたとばかりに、息を吐こうとも……ましてや吸おうともしないのだ。ただ、傷が疼いている。

そのあまりの拷問さに、リヴィーは思わず呻き声を上げた。意識が徐々に遠退いていくかのような気だるい感覚に一気に襲われる。目の前はボーっと虚ろになり、足にはまるで力が入らなかった。顔にかかる冷水の鋭さ。

時を刻むごとに重くなる衣類は、鉄の鎧なのだろうか……。

「リヴィー！」

しかしそんなリヴィーの意識を繋ぎ止めたのは、他でもない。地上にいたシフォーリルの声だった。

深く、そして身に沁みるほどの冷たさを持った脅威に流される二人を、漆黒の髪を振り乱しながら、地上から必死になって追っている。

キラキラと輝く翠の光が、時折宙を舞った。

「リヴィーッ！」

再度反響する、シフォーリルの声色。リヴィーはハツとし、その気だるい足を動かした。靴は水を含んだためか、どんなものよりも重たく感じる。

「……ッは！」

それでもやっとの思いで水面下から顔を出したリヴィーは、深く息を吸い込んだ。しかしその僅かな間にも、飛び交う水はリヴィーを苦しめ続けてくる。

これを災いとも言うのだろうか。顔を上げ息を吸い込んだ瞬間に、大量の水がリヴィー目掛けて襲ってきたのだ。

その水を宣告もなく飲み込んでしまったリヴィーは思わず噎せ返り、水中での態勢を崩してしまふ。身体はかくんと水面下に沈みかけた。視界は再び、ぼやける闇の世界へと飲み込まれる。

すると眼前の、どれほどの場所であろうか。照らす翠の光の中、漂う一つの人影があったのだ。栗色の髪にノースリーブと七分丈のパンツ姿の少年　　グリスだ。

しめた！

不幸中の幸いだとリヴィーは流れに身を委ねつつ、グリスを目指

して泳いでいく。

この闇の中では解りにくいのだが、相当の流れがこの川には働いているようだ。今までに体験したこともないほどの速度で水中を漂いながら、リヴィーはどんどんグリスの元へと迫っていく。

しかし何ということだろう。その川の流れはリヴィーに更なる牙を剥いてきたのだ。

リヴィーから眼帯が、奪われてしまう。

ハツとし、リヴィーは思わず急な流れを振り返った。けれどそこには暗澹たる闇ばかりが広がっているばかりだ。気泡も何も、見えやしない。あるのは翠の明かりだけ。

どうしよう……。

戸惑いと焦りばかりが、次第にリヴィーの動きを鈍らせた。

だがちょうどその時、視界の端に自らが追い抜いてしまおうとする人影があつたのだ。そこで本来の目的を思い起こしたリヴィーは咄嗟に腕をさし伸ばし、追い抜きかけた人影をその腕に捕らえた。

水面から顔を出したリヴィーは突き出た岩に掴まると、グリスをその肩に担ぎ直す。大量の水を飲み込んでしまったのだろう。グリスはリヴィーに身を預けながら、壮大に噎せ込んでいた。

「大丈夫か、二人とも!？」

追いついたシフオーリルが、二人の姿を見つけるなり大きな声でそう尋ねてくる。

「悪いな。グリスを引き上げるの手伝えるか」

リヴィーは髪から雫を滴らせ俯きながらそう言い返すと、「もうちょっと辛抱しろな」とグリスに言い聞かせた。

段々と息も整い意識もはっきりしてきたグリスは、リヴィーの言葉に素直に頷く。それはまだ力は弱いものであったが、グリスに反応が反応を示してくれたことに、リヴィーは内心ホツと息をつく。どうしてかりヴィーのほう救われた気分になったのだ。

それからまた短い距離をリヴィーは泳ぎ、足のつく場所までくると、そこにいたシフオーリルにグリスの身体を預けた。

自身も相当の無茶をしたリヴィーはのっそりと岸まで歩くとそのまま地べたに座りこんでしまう。

だが……、本当にどうすれば良いというのだろうか。

疲労以上に苛さいなんでくる、多大な不安感。俯いたままりヴィーは、両の手で顔を覆い隠した。濡れる髪が、頬に指に絡みついてくる。そしてその指先は目に見えて解るほど、細かく震えていた。

グリスを壁際まで運んでいったシフォーリルはそんな様子のリヴィーに気付くと、ギョギョをグリスの元に置き、足早に駆け寄ってくる。

「リヴィー。本当に大丈夫なのかよ」

「ああ、……そうだな」

平気だ。そう続いた言の葉とは裏腹に、リヴィーの声はどこまでも弱々しい。今にも消え入りそうな声音に、シフォーリルの心配は一層色濃くなった。

「嘘言つなよ。なあ、お前もこっちに来てゆっくり休めつて。な？」

そう言つと身をかがめ、そつとシフォーリルはリヴィーに腕を差し出す。 が、

「来るなッ!!」

刹那、拒絶の言葉と共に、シフォーリルの腕は叩き落されてしまったのだ。

「……リヴィー？」

あまりに突然のことで、シフォーリルはただ茫然とリヴィーの顔を見つめてくる。

そのショックとも悲しみともつかない顔色を浮かべたシフォーリルを目にしたリヴィーは、途轍とつとつもない罪悪感に駆られてしまった。自己嫌悪感。そればかりがリヴィーの心中で渦巻いている。

「悪い。けど頼む。……来ないでくれ」

ちやぷちやぷという水音。

立ち上がり、川の浅瀬へと入りながらもなお、リヴィーは「来な

いでくれ」と後退っていつてしまう。そのたびに翠の波紋は水面を走り、闇の中へと飲み込まれていった。後には何も、残らない。

嫌な静けさが、三人を包み込んだ。その中でリヴィーの荒い呼吸が、空気を振るわせる。どこかで水が、ぽちんと落ちた。

だが悲劇はまたもや襲いかかってくる。今度はあるうことか、リヴィーがその足を滑らせてしまったのだ。後退るために引いた足が硬い石の上でおもいきり滑り、身体ががくつと後へ持っていかれてしまう。

落ちる。

顔を覆っていたリヴィーの手は自然とそこから放れ、変わりに飛び込んできたシフォーリルがしかとその腕を掴み取ったのだ。

どれだけ来るなと言われども、さすがに見て見ぬ振りをするのは忍び難かったのだろう。おかげでリヴィーは水中へと飛び込むことを免れる。しかし腕を掴まれたと同時に、息をのむハツという音がリヴィーの鼓膜を震わせたのだ。リヴィーの胸に、言いようのない痛みが襲ってくる。

「まさか、……だよな」

掠れるほど小さなシフォーリルの声が、洞窟内で反響した。もう、手遅れだ。

ぎゅつと硬く両の目を瞑ったリヴィーは、己の運命全てを呪った。いや、それとも眼帯を攫っていった川の流れだろうか。

濡れそぼつ髪からは、未だに水が滴っていく。それはリヴィーの顔をも濡らしては、下方へ下方へと落ちていった。

また一つ、頬を雫が伝っていく。

締め付けられる心臓に畜生と呟くと、リヴィーは閉じていた両の目を開いたのだった。

するとそこには

「なんだよ、それ」

「騙すつもりはなかったんだ」

「おかしいだろ、リヴィー。だって、……これって……」

川に飛び込みそうなリヴィーを支えていたシフォーリルの手から、徐々に力が抜けていくのを感じる。彼の見つめるその先で、リヴィーは「悪い」と小さく謝った。

奥でグリスが、不穏な空気に揺るがせた表情を見せている。そして眼前では、シフォーリルが。

「……本当、なのかよ……」

シフォーリルは否定を懇願するかのように、リヴィーの顔を食い入らなければかりに見つめてきた。それでもリヴィーは唇を噛みながらとどめとばかりに、額に張り付いた長い前髪をゆっくりと掻きあげ、その全てを曝け出した。と、瞬時に空気は凍てつく。そこで息を引き攀らせたのは、はたして誰であっただろう。

闇の中で明らかとなったのは、忘れもしない。浅い海と同じ碧と深海の瑠璃色の、互い違う色の双眸。

認めては、もらえないかもしれない。それともいつそ、ここで歩み続けた互いの運命を切り離そうか

心中に渦巻き続ける想い、思い出。嬉しかったはずのことさえも、今はリヴィーを殺すに等しい威力を秘めていた。胸の奥底で誰かが言うなど、認めるなど声を張り上げている。それなのに……

「我が名はリアン・ヴィス・ジュニティー・クルス。バリス王国王家の第三王女であり、この国家を守るにて王位を継承する者」

ドレスの裾をつまむような動作をすると、リヴィー いや、リアンは、苦々しい表情のまま淑やかに頭を垂れたのだった。

彼らの中で、何かが音を立てては崩れていく。

流れゆく水がリヴィーの足に当たっては、幾多もの飛沫を躍らせた。

世界から言葉がなくなつて、一体どれほどの時を経ただろう。今もなおひしめき続ける静寂の精。空気は時間を追うごとに重くなり、息を吸い込めば咽に引つかかるほど。

唇を真一文字に引き締め頭を垂れたままのリヴィーは、足元で戯

れている冷水をずっと見つめ続けていた。口を開き難い空気は、その間にもより一層の濃さを増していつてしまうのに……。

「なあ、リヴィー。……冗談は、やめようや」

すると静寂を蹴破って、シフォーリルが言葉を吐いたのだ。だがそれは、先ほどとまったく変わらぬ。どこまでも弱々しく、そして真実を知ることへの恐怖を垣間見せている。

はっとしたリヴィーは目を見張りながら、シフォーリルの表情を窺った。

「だって俺達、王女を追いかけてここまで来たんだろ。……それなのに何で、お前が王女にならなきゃいけないんだよ」

そんなの、おかしいじゃん。

戦慄^{わなな}く唇でそう呟くと、シフォーリルは項垂れる掌をぐっと握りしめた。

「俺は認めない。信じない。リヴィーが王女だなんて、そんな……」
シフォーリルの瞳が、淡く揺れ動く。くつと咽を鳴らすと、そのままリヴィーから視線を背けてしまった。

また彼の背後では 그리스 も俯いており、そのことにリヴィーは少なからず心を抉られる。裏切られたのは、自分でない。きつと自分が彼らを裏切り、そして騙してしまったのだ。胸を抉るのは、そんな罪悪感の数々。

リヴィーはシフォーリルの言葉に少なからず動揺してしまったが、それでも意地とばかりに毅然と面^{おもて}を上げたのだ。

「いいんだ。王女とか認めてもらわなくなつて、んなことは別にしまわねえよ。俺はリヴィー・グラディス。リヴィー海賊団の船長だ。ここではそれ以上もそれ以下もねえ」

今はリアンではなく「リヴィー」という一人の男だ。そうきつぱりと言い切ると、リヴィーは二人に近づいていった。

水を掻き分ける僅かな音が、沈みきつた空気を揺らしていく。重たい足で歩み寄っていったリヴィーはシフォーリルの肩に手を回すと、そのまま陸へと突き進んでいった。涙ぐむ瞳を大きく見開き、

シフォーリルはされるがままに後ろ向きに歩き出す。

「けどさ、これだけは知っておいてくれ。俺がこの世に似合わねえくらい、クソったれな王女なんだってな」

そう言うとりヴィーは、シフォーリルをグリスとギョギョの間に座らせた。

不思議な輝きを持つオツドアイが、二人の姿を見つめ続ける。

どこかで水が、ぴちゅんと跳ねた。

十

夏のある日のことだった。幼少時からの愛読書を片手に、リアンは一人の侍女と共に庭へと赴いていたのだ。

王宮は広く、城門から入り最奥まで進むと、そこには海を臨める場所がある。そこは外から覗けば崖のようになっており、他に景色を邪魔する物が何もない。海が大好きなリアンにとっては最高の場所だった。

急に告げられた婚約の話。つい先日にはその彼との逢瀬もあり、リアンはどことなく疲れを感じていたのだ。

近頃は多くのことがリアンの周りで起こりすぎていた。そのせいで色々なことが、まだリアンの頭の中で上手くまとまっていけない。そしてそのもやもやとした気持ちは高まる一方で、お気に入りの萌黄色のドレスを着ようとて、晴れることはなかったのだ。

だからだろう。たまに与えられる自由な時に、この場所を訪れたのは。

「リアンはその本が好きなのね」

「ええ」

侍女の言葉に頷くと、リアンは本にいとおしげな視線を落した。

幼い頃から姉妹のように、この侍女とリアンは育ってきた。

そのせいもあって、この侍女だけはリアンと普通に それこそその歳相応の少女達のように言葉を交わすことができたのだ。

他の侍女や騎士、ましてや姉などとはとてもじゃないが、リアンは普通の会話をすることはできない。いつも畏まってしまふ。

つい先ほども他の侍女達を説得して、彼女だけを連れてきたほどだ。

その侍女はリアンの持つ本の表紙をそつと見ると、口元をほころばせながら尋ねてきたのだ。

「何がそれほど、リアンを夢中にさせるのかしらね」

しかし何と聞かれてリアンの脳裏に浮かんできたのは、たった一つ。あの光景。

「んー、そうね。……ここには私の知らない世界ばかりが、広がっているからかもしれないわ」

「まあ。それではリアンは、世界を駆け巡る海賊にでもなるのかしら」

くすくすと口元に手をやりながら、侍女はそう言っていてリアンを見やった。

リアンも「そうね」と頷きながら、白い薄地の手袋をつけた手をそつと口元まで持っていく、ふふつと笑った。

「その時はきつと、どこよりも面白い海賊団にしてみせますわ」

その数日後、満ちた月の見守る晩に、リアンは城を抜け出したのだ。

お気に入りの萌黄色のドレスを着、片手には愛読書を持って、こつそりと。

人の眼を盗み、上手い具合に逃げ切ったリアンは、その日のうちに自慢の髪をばつさり切り捨てた。違う色の瞳を隠すために、眼帯もつけた。服もドレスから男物のそれへと着替えた。

月が照らすその中で、リアンはリヴィーへと生まれ変わったのだ。つた。

それは二年と半年以上も前の、夏のある夜。

十

「俺が逃げ出しでもしたら、国中はきつと大騒ぎになるって、そんなことは知っていたさ。案の定城を出た翌日にはもう、知っている

顔が駆けていくのを幾度も見送ったからな」

言うなりリヴィーは自嘲気味に笑った。

「罪悪感は勿論、それなりにあったよ。それにこの国ではさ、やっぱり海賊って悪い輩だし。……仮にも王位を継承する王女がさ、家出に加えてそんなヤバイことをしちゃって良いわけないよなって思った」

国家総出の搜索作業は、今なお続けられている。彼との婚儀はもうすぐそこまで迫っているのだ。そんな時期だからこそなお、彼らは血眼になってリアンを探しているのかもしれない。そこでこんなことがバレでもしたら、一体どうなることであろうか……。

「城を出る前から、薄々解っていたんだ。俺はどうしようもない馬鹿王女なんだろうなって」

笑っちゃうよな。

そう言うとりヴィーは苦笑して、だが一変、いつもの精悍な表情に戻ると 그리스 とシフォーリルを見つめ返してきたのだ。

「でも言うっておくけど、この道を歩んできたことに、俺は今まで何一つ後悔したことはねえからな。こんな大切な仲間達にも出会えたことだし」

ましてや初めて自らで、自らの世界を変えたのだ。この生活が嫌だと嘆いたことは、一度もない。

誇らしそうに虚空を見つめるリヴィーに、 그리스 がやんわりと口を挟んだ。

「けれど、リア」

「『リアン王女』つつつたらテメエ、本気で殴り飛ばすからな」

「え、えとツ。リヴィーさんのことは、大筋解りました。リヴィーさんとリアン王女が同一人物であることも納得しました。けれど……そうしたら、先ほど見たリアン王女のごとは、どう説明をつけられる良いのでしょうか」

ドスの効いた声で脅し混ざりの訂正をされた 그리스 は、額に汗を浮かべながら記憶を辿った。

確かに先刻シフォーリルが言ったとおり、彼らはリアン王女を追って、ここまでやってきたのだ。リヴィーがリアンなのだとしたら、あのリアンは何だと言えよう。

「ありゃあ、きつと出たんだらうな」

しかし大して驚いた風もなく、リヴィーはさらりとそんな不可解な言葉を返してくる。

「出た？」

疑問に満ちた声音で、シフォーリルは聞き返した。

「そ。人の姿を勝手にかつぱらう妖精・ギリユアがな。どうせ俺の心でも読んだんだらう」

へつと乱暴にため息を吐き出すと、リヴィーは王女にあるまじき上腕二等筋をもう一方の腕で引き寄せ、軽くストレッチをした。

それから指の関節を片手ずつ、バキバキと鳴らしていく。

「ま、正直俺の方がビビツたよ。『何で俺がこんなところにいるんだよッ!』で。しかも半端なく足速えし」

軽く敗北感味わったな。

そう言うがリヴィーはいつもの笑顔を取り戻し、二人に向かって手を差し伸べてくる。

「けれど、俺は俺だ。例え周りが何と言おうと、俺は確かにこの海賊団の船長で剣士で、そもそもってリヴィー・グラディスなんだからな」

だから忘れるなよ。今だけは俺が、王女じゃないってことをさ。

穏やかな声が、暗闇の中に響く。

リヴィーの手を取り二人が立ち上がると、翠の明かりは嬉しそうに舞い降りていった。

「行くぜ、野郎ども。目指すはこの出口だ!」

今までにない歓喜の声を上げながら、三人は歩みを再会させた。闇へと突き進む足取りは、どこまでも軽い。

遠くに白い点が見えたのは、あれから小一時間歩いてのことだっ

た。歩けば歩くほどその点は大きく、よりはつきりとした姿を現してくる。

暗闇の終焉だ。しゅうえん

三人は互い顔を見合って、それからへへっと笑いあった。足取りは魔法でもかけられたかのように軽い。まるで今まで渦巻いていた不安や心配も、全て吹き飛んでいくかのようだった。

今なら空の彼方まで飛んでいける気がする。

タン　　ッ！　　とリヴィーは一步、踏み出した。思わず駆け出した足。両の腕を大きく振りながら、風に溶け込んで光を目指していく。

飛べ。羽ばたけ。

そんな幻想を抱きながら、それでも一心に。

リヴィーの後を追って、二人も軽快な足取りで走ってくる。翠の光が軽やかにふわりと宙を舞った。

川のせせらぎは、どこまでも一緒についてきてくれる。どこか力強いような錯覚。そんなものを感じながら、三人は光ある場所へと飛び出していったのだ。

途端、世界は一気に解放され、すうっと何かが抜けていく音が耳に聞こえる。

今まではまるでなかった爽やかな風が、三人の髪を服を揺らしていった。思わずほろつとリヴィーは瞳を細める。

そこはあまりにも美しく、どんな場所とも似つかない風景が広がっていたのだ。

丸く切り取られた、広大な空間。そこを包み隠すように、今しがたりヴィー達が抜けてきた灰白色の岩山が取り囲んでいる。

そして足元には、綺麗な草花が一面に咲き誇っていた。中央にはそれほどでもないが森があつて、そこを目指すようにあの川の水がちろちろと流れている。川の終点は澄み渡った泉になっていた。

断崖に囲われた楽園。　　だがそれだけで片付けることなど、到底できなかつたのだ。

何よりもリヴィーが己の眼を疑ったのは、絶壁の合間から垣間見える空の色だった。そこに浮かぶは、夜明け直前の色。明るみを増すばかりの蒼闇あおやみと、微かな茜が入り混じっているではないか。まるで本で読んだような風景。あの海賊達がたどり着いた、最後の楽園のようだ。

高まる興奮と、それを抑える威厳と。はたしてどちらがリヴィーの本心であろうか。リヴィー本人でさえ、その真相は解らない。

ただ言葉にしないながらも、胸には満ち満ちる感銘が今のリヴィーを支配していた。見開かれ輝きを放つ双眸が、それを物語っていたのだ。

そしてそれは何も、リヴィーだけのことではない。隣にいるグリムもシフォールも、リヴィーと同じような表情をしては、切り取られた天空をじっと見つめていた。

明けの星が、朝の空でひときわ輝きを増していく。蒼闇は徐々に、茜色と混じっていった。そして世界は金色こんじきに彩られていったのだ。

「
」
彼らは一様に、天を仰いだ。するとそこにいたのはかなりの大きさを誇る、金色の一羽の鳥が羽ばたいてゆくではないか。

長い尾羽を宙で踊らせ、ルビーのように麗しい赤い瞳で、この切り取られた地上を見つめていくのだ。

そして奇蹟は、徐々に花開いていく。

今まで静かだった、この楽園。しかし鳥の放つ金色の光に包まれた途端、多くの草花が咲き誇り、動物達が姿を現してくる。

それも、どこでも見ることでできないような見知らぬ動物ばかりが、そこには集っているのだ。そのどれもが威光ある出で立ちをしており、動くことさえ憚られるほど。

金色の鳥は光を存分に与えると、やがて上空を旋回し始めた。

その瞬間、この場にいる動物達も行動を始め、穏やかな風景がそこに描かれてゆく。

動物は草を食み、清い水に口をつける。鳥は木々を渡り戯れては、

甲高い鳴き声を響かせてゆく。青い鳥が夜明けの空に溶けゆくように、ふわりふわりと飛んでいった。

「……ディファアラだ……」

吐息よりも小さな声で、リヴィーは呟く。

ディファアラだ。

ずっと捜し求めていた、最後の楽園。この最果ての孤島に、それはあったのだ。

高鳴る胸の音は、もうとめることができやしない。感動のあまりに口を閉じることすらできず、しばし彼らはその光景に見とれていた。

「……なあ」

正面を向いたまま、リヴィーは口を開いた。

やはりそれは小さな声で、けれどこの空間ではやけに大きく聞こえる。

リヴィーの言葉を聞いた二人は、はっと彼に視線を向けた。感動に輝いている背中が、その目に映る。

静寂に包まれた、幸せの空間。

この地上に与えられた最後の楽園に、鳥が一羽、また一羽と羽ばたいていった。

リヴィーはゆっくり、振り返る。

そして柔らかで優しい表情をその顔に浮かべながら、リヴィーは互い違う双眸を細めた。

光射す全ての始まりの時間の中で、それは他に類を見ないほどの幸福感に包み込まれている。

リヴィーはすうっと微笑むと、言の葉を紡いでいった。

「戻ろうか。このことを奴らにも、聞かせてやりたいからな」

その声は今までにないほど、穏やかだった。

ブロンドの髪が、そよ風に靡く。

世界は再び、動き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0613d/>

青き大地の果てに

2010年10月8日15時34分発行